

## 見果てぬ夢

吉 武 素 二

去る2月2日、気象庁の第一会議室において、日本気象学会の評議員会が開かれた。気象学会の今後のあり方について、活発な意見が述べられた。その中で、機関誌「天気」の記事がかたくなって編集に苦勞しているとのことだった。帰途、そのことが脳裡に残っていたのだろうか、こんなことを記事にしてみたら、読者の頭の働きをやわらげ一服した気分になれるのではないかと思い、筆をとることにした。

B-29による本土空襲が始まった頃のことである。ある日、突然、藤原咲平先生が中年の男を連れて、部屋に入って来られた。先生が、この人は糸屋の主で、B-29の編隊を雁子がらめにして、全滅させる方策を考えていると紹介された。面倒を見てやってくれとのことと啞然としてしまった。先生は、このような奇抜な考えをもった人を遠ざけることはなく、相手するのをむしろ楽しんでいっちゃったのではないだろうか。毎日僕の部屋にやって来て、無言のまま黙々と、粘土をこねまわし、玩具のヨーヨーらしきものを作っていた。こちらから話しかけない限り黙ったままだった。こんな日が何日か過ぎて、彼がもらす断片的な言葉から推察すると、糸巻にピアノ線を巻きつけたものを数多く、空にばらまけば、解れたピアノ線にB-29がからまって落ちるといふことらしい。あたかも、蜘蛛の巣に蜻蛉が捕って動けなくなるようなことを連想しているようだった。彼の家業は糸屋である。空襲は日を追って激しさを増し、東京は一面焼野が原と化した。いつの間にか、糸屋の主の顔を見ることもなくなった。

こんな奇人の相手をして当惑したという思い出はない。彼が教えてくれ、今だに覚えていることは、角帯の結目が正五角形であるということである。割箸の包装紙で試してみるのも、暇潰しの楽しみである。

先生の奇想天外ぶりは驚くばかりであった。戦後、食糧難に喘いでいた時にも、少しも衰えることはなかった。横須賀軍港に、撃沈を免がれた日本海軍の艦艇が多

数、繫留されているのを耳にされ、海防艦程度のものを何とか手に入れ、洋上の気象観測船に転用できないものかと考えられた。先生は、早速に艦艇の引渡し交渉をG.H.Q.と始められた。先生の意図された真意が通じ、海防艦3隻が引き渡されることになった。先生に同行して横須賀まで出かけたことを懐しく思い出している。戦後はじまった定点観測の原点である。

飢えている時は、凡人は食べることに追われ、他のことを考えない。広島に落された原子爆弾の威力に驚き、国民は虚脱状態に陥ってしまった。先生の脳裡には、原子爆弾の威力を、時には大災害をもたらす台風にぶっつけてみたら、台風が潰れないまでも進路を曲げてしまうだろうと考えが浮んでいた。先生の考想はG.H.Q.を通じて、米本国に伝えられ、アメリカ気象学会で論議の対象になった。数人の気象学者（その中にはロスビーもいたことだろう）が集って討議し、一応の結論を出した。その答えが、G.H.Q.を通じて、藤原先生の手許に文書になって届けられた。その文書を見せてもらったが、残念ながら今、何処にあるのか、既に他の書類とともに焼却されてしまったかもしれない。残っているとすれば、終戦後、米軍との交渉の窓口だった渉外室（室長は今里能氏）の書庫にひっそりと、他の書類に挟って静かに眠っているだろう。公文書の保存整理にたけた米国の公文書館、あるいはアメリカ気象学会の書庫に残っているかも知れない。

この文書を見せてもらって臆げながら覚えていることは、文書は二枚のタイプライター用紙だったこと、台風が広島級の原爆を落したとしても、さしたる影響はないという結論である。また、この結論が米国の気象学者が集って討論したものであると書かれていた。

思い出せば、先生の学位論文は音波の異常伝播を取り扱ったものである。第一次世界大戦後に、欧州が戦後処理として軍用の火薬庫に残存する大量の火薬に火がつけられた。その爆発音の伝播が異常な分布を示したという観測資料がもとになっている。先生の一生は波瀾万丈の

時代だった。

新宿で都営地下鉄を降り、小田急に乗り換えた。脳裡に止め処もなく戦争と気象にまつわる思いが浮んできた。気象レーダーは戦時中に開発された技術によるもので、気象衛星ひまわりまた然り。原子力発電も戦争と無縁ではない。湾岸戦争は日に増し、激しくなっている。

戦後、人工降雨が問題になり、盛んに実験が行われた。火力発電の不足を補うため、水力発電所が各地に設置され、大型のダムが築かれた。湯水は水力発電にとって最大の敵である。人工的に雨を降らせ、ダムの貯水量を増やしたい。電力会社は気象台、大学と協力して実験に取り組んだ。昭和30年前後のことである。当時、僕は名古屋地方気象台に勤務していた。中部電力株式会社と協力して、飛騨の高山で、沃化銀を使って降雪実験を行った。高山は周囲に山を巡らした盆地にあり、冬期底冷えのするきびしい所である。早朝の最低気温は零下10度以下になることが多く、無風である。実験には最も適している。

当時の中電の社長は井上五郎氏で、後に気象協会の会長を兼務され、協会の発展に尽力された。実験に要する

経費は、ほとんど中部電力側の負担だった。社長は渡米の際に、シェファー博士に直接会って、人工降雨の現状を具に聞かれたとのことだった。実験に理解を示しつつ、実用化にはほど遠いというのが社長の考えだった。連日におたる高山の実験で、沃化銀の煙を出すと、小さな雪の結晶が空中にきらきら光って浮遊しているのが確認された。

戦前、稲刈りを終った頃になると、毎年のように、旧陸軍の大演習が行われた。野砲も参加し、盛んに空砲をうった。大演習のあとには雨が降るといのは、学問的に確かなのだろうか。このところ、湾岸地帯では日夜、ロケット弾をはじめ、歴大な量の実弾が飛びかっている。また、油田地帯には大火災が発生している。そのために気象異変が起きても不思議ではない。人工降雨の扉を開く鍵が見付からないだろうか。

戦火が治まり、平和が訪れても、跡に荒廃した山河が残る。戦争を機に、人工降雨の技術が実用化されたらと思う。人工降雨による砂漠地帯の緑化、それは夢かもしれない。